

NPO 法人

全日本語りネットワーク

〒376-0006 群馬県桐生市新宿 1-4-33
 (Fax) 0277-43-8225 (振替) 00130-2-114808
 (E-mail) welcome@japankatarinet.jp
 (HP) http://japankatarinet.jp/

2017. 8. 6 発行

ニュース

「お話」と「語り」の力について思うこと

小林啓子（東京都大田区 NPO 法人全日本語りネットワーク理事）

私は元児童図書館員でした。「お話／ストーリーテリング」を始めたのは「子どもたちに物語の面白さを知ってもらい、本に繋ぐ」という目的からで、テキストをそのまま覚えて語ってきました。始めは仕事上のこと、義務感とともに始めたのですが、次第に楽しくてやりがいのあるものになってきました。聞き手の子どもたちの反応から、子どもたちはどのように物語を受け止め、楽しむかということが察せられて、それが子どもの本を選ぶ上でも役に立ったように思います。

そんな時、ある講座で子どもの本の作り手である講師から「自分は岩にかじりついてでも、子どもたちに未来は明るいと伝えていく覚悟」であるというお話を聞きました。感動した私は、この言葉を児童図書館員としての自分の心構えとしたのですが、お話を選ぶ上でも大切な指針となっています。

私は上手な語り手ではありませんし、自分の声も好きではありません。それでも語ろうと思うのは、昔話などのお話には人間の知恵、さまざまな価値観があり、子どもたちにそれを伝えたいと願うからです。皆と一緒にお話を楽しんでもらうことが、僅かでも聞き手の子どもたちの生きる力に繋がればという想いを、ひっそりとお話に託してきました。

これまではそんな考えで、気持ちはお話が伝えるものに向いていたのですが、先日、図書館関係雑誌 2 誌に載った、東日本大震災の復興と支援の取り組みの報告 5 年分をまとめて読むという機会を得ました。主に子どもと子どもの本に関する内容に焦点をあてて読んだのですが、人々の復興に向けた努力や祈りと共に、本やお話が子どもと周りの大人たちに笑顔や安心感を届けたことが報告されていました。その中で私の心に残ったことの一つが「心／人間の復興は文化・芸術で成される」という福島大学の先生の言葉でした。

実は、この言葉を目にした時は今ひとつ実感が湧きませんでした。ところが、とあるマンガを読んでいて、その言葉の意味が「ああ、こういうことか」とすーっと心に入ってきたのです。それは終戦直後の沖縄で追いつめられ、自決を覚悟した一人の女子高生が、詩について会話するうちに、不意に「私、笑ってるわ」と気がつくという場面でした。どうしようもない絶望の中にいる彼女が、人間らしい自分を取り戻した一瞬が描かれていました。先生の言葉はもっと広い意味を持っていたと思いますが、私なりにその言葉を実感できた瞬間でした。そしてそれは別な報告にあった「震災直後の子どもと私にとって、絵本があって本当に良かった」と語る母親の姿とも重なりました。

私は「お話を伝える／届けていく」ことの大事さにも気づかせてもらいました。「語り」は「心／人間の復興」を成す力を持っていると思います。

実際のところ「お話」と「語り」は私の中で混沌としているのですが、全日本語りの祭りに参加して「お話」「語り」の世界は実に広くて豊かだと知りました。これからももっとたくさんのお話を知り、語りを聞いて、語り手のテクニックや人間性に触れながら学ばせていただきたいと思っています。お話が持っている良いもの、生きる知恵、生きる力を多くの人と共有できることを願って。

（ちなみに、とあるマンガとは、近代文学から着想を得た幻想的な作品『月に吠えらんねえ』（清家雪子、講談社）です。読むには相応の覚悟がいました。）

